

令和7年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月2日実施)	総合評価 (3月11日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	①自立と社会参加をめざし、系統性のある小・中・高一貫した教育課程の編成と学ぶ楽しさを実感し、主体的な活動を引き出す授業づくりに取り組む。	①-1 系統性のある教育課程に向けた検討を具体的に進める。 ①-2 ICT機器の活用を推進する。	①-1 「育てたい子ども像」や学部教育目標を観点別に整理し、小中高の系統性を意識した内容にする。 ①-2 ICT機器の活用について、実践事例を集積し、良い取組を発信する。	①-1 小中高の系統性を意識して学部教育目標を見直し、教育課程の改善に向けて検討をすすめることができたか。 ①-2 ICT機器を活用した授業の充実を図ることができたか。	①-1 小中高の系統性を意識し、「育てたい子ども像」について見直した。それを踏まえ、次年度の教育課程を検討することができた。 ①-2 小学部はドロップトークやボイスペン等の活用事例を共有しながら進めた。中学部は指導内容に合わせた歌詞を作り、AIで作曲するなど、わかりやすく学べるよう工夫した。 分教室では1人1台端末や電子黒板を活用して教材や生徒の意見を共有して学習を進め、主体的な活動を引き出した。本校では11月から電子黒板を導入した。	①-1 今後も各学部の系統性を踏まえ、PDCAサイクルに則って教育課程を見直し、改善を進めていく。 ①-2 子ども達にとってわかりやすくなり、意思伝達の幅を広げるうえで一定の成果を出すことができた。今後は活用事例を学校全体で共有して取り組む必要がある。 引き続き分教室での取組を進めるとともに、本校での活用を促進させていきたい。	①-1 「育てたい子ども像」は、児童生徒自身が考えていくことが大切である。どんな大人になりたいか、夢や展望があり、そのための計画・設計が教育課程である。個別教育計画に育てたい力、育みたい力を示していく必要がある。 ①-2 電子黒板の利用を一気に拡大するのは難しい。利便性を理解することが大切である。既存のメディアがあると、それに頼り、新しい取組にはつながらない。先進的な活用をしているところがあれば、その事例を活用することが大切である。	①-1 小中高の系統性を意識し、「育てたい子ども像」について見直した。それを踏まえ、次年度の教育課程を検討することができた。 ①-2 小学部ではICT環境が整い、内容が豊かになった。生成AIの発達に伴い無くなる仕事があるが、何かを作り出す仕事は価値が高まっていく。中学部の味噌づくりなどは将来の可能性を広げる経験になる。 メールの活用、パスワードの作り方などの基礎的な情報リテラシーの学習を行った。過度な依存や、闇バイトのような詐欺等の危険があるので、自分で対応できるようにしていく必要がある。	①-1 「育てたい子ども像」は本人、保護者、学校、社会で必ずしも一致しない。今の時代に求められるものは多様であり、子どもによって異なる。自ら考え、他者と協働できる人材が求められる。教員全員が共通理解した上で、保護者や本人と共有し、共通の価値観をもって対応することが大切である。 ①-2 画面制限やフィルタリング、時間制限等を設けながら適切に使用しつつ、基礎的な情報リテラシーを教える必要がある。危険だから使わないではなく使い方を教えていく必要がある。
2 児童・生徒 指導・支援	①児童・生徒個々の個性を尊重し、教育的ニーズを適切に把握し、生活年齢、発達段階に合った指導・支援を組織的に行う。	①児童・生徒の教育的ニーズを把握するための客観的指標を活用し、それを指導計画に反映して指導・支援を行うとともに、その有効性と課題を検証する。	①-1 小中高の系統性を意識したアセスメント計画を検討し、個別教育計画に反映できるような仕組みをつくる。 ①-2 アセスメントについての研修会を企画・実施し、教員の理解を図る。	①-1 個別教育計画に反映できるアセスメント計画を作成することができたか。 ①-2 アセスメントについての研修会を企画・実施することができたか。	①-1 小学部・中学部では、アセスメント計画を作成し、太田ステージや給食等のアセスメントを実施できた。適宜専門職と連携し、多面的な実態把握と個別教育計画への反映ができた。高等部では、新入生に対して12月に太田ステージを実施し、指導に反映できた。 ①-2 夏季公開講座では外部講師による太田ステージの研修会を実施した。また、太田ステージに基づき教材を分類し、アセスメントやケース会の際に教員に教材の紹介を行った。	①-1 小学部・中学部だけでなく、高等部についても年度初めにアセスメント計画を作成し、個別教育計画に反映させていく。分教室では、1年生から就労に向けたアセスメントに取り組むことにより、より良い指導につなげていく。 ①-2 当日校内からは43名の参加があったが高等部、分教室からの参加は少なかった。教員1人ひとりにより主体的に取り組んでいくように働きかけていく必要がある。	①-1,2 経験や勘で教育する時代ではない。アセスメントをもとに指導計画を立てることが大切である。太田ステージ等、統一して進めると良い。ただしアセスメントでわかるのは1つの側面にすぎないことも押さえる必要がある。「できなくても良い」ことも大切である。苦手なことばかりやらせると子どもはしょげてしまう。指導計画に反映させるのは良いが、楽しく認められる中で得意なことを伸ばし、苦手なことは1人1台端末で支援できるとよい。	①-1,2 高等部では、新入生に対して12月に太田ステージを実施し、指導に反映できた。教員が経験を積むほど、経験だけで大丈夫と考えてしまうところが、アセスメントが定着しにくい背景にある。計画を立てるだけでは定着しない。アセスメントを実際に活用し、成果が見えるようにすることで、定着していくと考えられる。 「自分はこうしたい、こうありたい」という気持ちを、健やかに持っているように支援する必要がある。	①-1,2 年度当初にアセスメント計画を作成し、4~5月に実施する。その結果をもとに支援策の検討を行い、個別教育計画に反映させる。さらに成果を共有できるようにして定着を図る。 苦手なところを無理に改善しようとする、辛くなる可能性がある。得意なところを伸ばすことで全体が良い方向に向かうこともある。アセスメントはそのバランスを見るためのものとして活用できるとよい。得意なことを伸ばし、できないことにチャレンジする。
3 進路指導・支援	①一人ひとりの将来の自立と社会参加のあり方を見据え、発達段階とライフステージに沿った進路指導・支援を組織的に行う。	①小中高それぞれのニーズにあわせた適切な進路に関する情報を提供するとともに、ライフステージに沿った進路指導・支援を行うことで、個別最適な進路指導に努める。	①-1 小中高それぞれの保護者のニーズにあわせたテーマでの学習会・見学会等を検討し、実施する。 ①-2 定期的な発信方法やHPへの掲載等を検討する。 ①-3 進路指導を更に効果的にするために、キャリア・パスポートの活用を進める。 ①-4 「せやみつ進路ミーティング」	①-1 小中高それぞれの保護者のニーズにあわせたテーマでの学習会・見学会等を検討し、実施できたか。 ①-2 小中高それぞれに適切な進路情報を提供できたか。 ①-3 キャリア・パスポートの活用を進めることができたか。 ①-4 三ツ境支援学校との協力体制を確立	①-1 福祉事業所や企業の見学会を企画した。また、グループホーム職員による講演会を開催した。「企業と語ろう in せや」を開催した。本人や保護者の進路に向けた不安を軽減する機会となった。 ①-2 高等部は校外学習で事業所の活動を体験した。また外部講師による自己理解を深める授業を実施した。 福祉事業所から提供された作業や実習材料を活用し、実習や作業学習にも取り組んだ。	①-1 グループホームの講演会には保護者が多数(59名)参加し、好評を得た。今後もニーズに応じた情報提供をしていきたい。 ①-2 生徒の自己理解を深めるために継続して取り組む必要がある。 3年次の現場実習への不安や悩みの軽減につながっている。今後も継続して事業所に依頼する。 ①-3 高等部や分教室で自己理解を深め、将来を考える取組を実施したが、小中学部を含めた学校全体の取	①-1,2 どのように社会参加するか機会のあるごとに問いかける必要がある。こうなると良い、こうなると刷り込まれてきたが、テクノロジーの進展でそういう時代ではなくなった。一生のうちに何度もリニューアルし、学び直さなければならぬ。知識だけでなく、自ら学べるようにする必要がある。今は社会参加の選択肢が限られており、過大な期待はするなというのが進路指導になっている。20歳で辞職が多いが年	①-1 グループホームの講演会や「企業を語ろう in せや」など、地域の小中学校教員や保護者への進路情報の提供の場を設け、多くの参加を得た。 ①-2 高等部では、自立訓練事業所から講師を招き、得意・苦手手を整理する学習に取り組み、生徒からの好評を得た。また、特例子会社に勤める卒業生に仕事内容や余暇の過ごし方について話してもらい、生徒の働くことへのモチベーションにつながった。 ①-3 大和東分教室での取組にとどまった。高等部や分教室で	①-1 保護者向け広報や説明会を定期的実施し、進路支援について具体的なイメージを提供する。 ①-2 社会に出る際の働き方は多様であるため、校外学習や実習等で、好きなことや得意なことに気づける場面、友達同士で経験できる機会を多く作る。 学校で学んだことだけで一生働ける時代ではない。価値観も必要なスキルも変わる中で、自分を更新する力が必要である。変化が苦手な人も多いため、集団で支

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月2日実施)	総合評価(3月11日実施)		
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等	
				は、三ツ境支援学校との協力体制を確立し、内容の充実を図る。	し、内容の充実を図ることができたか。	①-3 大和東分教室では「就労パスポート」等のツールの活用や面談を通して、生徒が自分の課題に気付き、整理できるよう支援した。 ①-4 今年度は三ツ境支援学校主催で昨年度に引き続き実施することができた。	組として進めていく必要がある。 ①-4 参加者(9名)が少なく、広報や内容に改善が必要である。	金が入れば社会参加しなくても良いのか。保護者にそう思われぬようにするにはどうしたらよいか考える必要がある。目的意識を持てるようになった子は伸びる。	は自己理解を深め、将来を考える取組を実施したが、小中学部を含めた学校全体の取組として進める必要がある。 ①-4 三ツ境支援学校主催で開催した。参加者が少なく、広報や内容に改善が必要である。	え合う力が重要である。 ①-3 学校全体として取り組んでいく。「自分はどうしたい、こうありたい」という気持ちを持てるように支援していく。 ①-4 次年度は本校主催での開催となる。広報や開催時期、内容を工夫していく。
4	地域等との協働	①共生社会の実現に向けて、地域におけるセンター的機能を継続するとともに、コミュニティ・スクールとして地域との協働による教育活動を展開する交流及び共同学習を通じた児童・生徒の相互理解を図る。	①-1 本校のセンター的機能をより実際的なものにするために、学校コンサルテーションを意識した取組を推進する。 ①-2 地域との協働による教育活動を推進する。	①-1 学校コンサルテーションを意識し、学校の教育力を高めるための情報発信や助言等を積極的に行う。 ①-2-1 交流フェスティバルは部会形式で取り組みながら、引継ぎも含めて丁寧に進める。 ①-2-2 現在の価値観や地域のニーズ、職員の働き方などを踏まえ、地域資源の活用を積極的に進める。	①-1 情報発信や助言等を積極的に行うことができたか。それによってどのような成果が得られたか。 ①-2-1 部会形式で取り組み、地域と一体となって円滑に運営することができたか。 ①-2-2 現在の価値観や地域のニーズ、職員の働き方などを踏まえた地域資源の活用を進めることができたか。	①-1 巡回相談では、組織的な支援につながるよう、クラスや学年を含めたフィードバックを実施した。 教材教具展示・相談会を行った。夏季公開講座でオンデマンド配信し、教育・福祉関係者、保護者等が参加した。教育支援だよりや教材のHP掲載等を行った。 ①-2-1 部会形式で円滑に実施できた。地域の意見を取り入れて企画できた。 ①-2-2 自治会やPTA、上瀬谷小学校や福祉事業所が参加し、にんにくの種植え・収穫を行い、中屋敷ケアプラザやガパオ祭りで販売した。中屋敷ケアプラザで定期的に清掃活動も行った。 大和東分教室は高校と連携して模擬投票を行った。 大和南分教室では、薬局で品出しの手伝いなど地域と協働した学習を進めた。	①-1 今後も組織的な支援につながることを常に意識しながら情報発信や助言等を行っていけるように工夫したい。 継続して情報発信や助言等を行っていききたい。オンデマンド配信を継続し、より広く発信できるようにしていきたい。 ①-2-1 今後も部会制の良さを生かしながら、学校と地域で業務を分担していく必要がある。 ①-2-2 教員の体制を考慮し、実施回数を整理した。大和南分教室では新たな活動場所を開拓することができた。引き続き活動内容を検討する。 児童生徒の実態に合った地域資源の活用ができるように、ゲストティーチャーの情報等の整理と校内発信を工夫する。	①-1,2 様々な形で地域との連携ができており、本当に良く取り組んでいる。これまで地域になくはない存在という視点で取り組み、今につながっている。学校コンサルテーションについては、当初は「便利屋になってしまふのではないか」「本来は自分の学校のための人員」という意見があった。しかし地域からこちらにも帰ってくるのではないかという話になった。今はうまく地域とつながることができている。今年度は瀬谷区民マラソンが本校を会場として実施された。消防署や警察とのつながりもあり、交流フェスティバルで展示等も行っている。50年以上の歴史があり、広い敷地の魅力がある。それを十分に発揮できるとよい。	①-1 64回の巡回相談を実施した。横浜市・大和市の教育委員会にも伺い、それぞれの方向性を知り、連携する機会を得た。 ①-2-1 交流フェスティバルは、今年度から部会制を導入し、地域の方々が部会に参画した。地域の意見を内容に反映させ、それが集客の増加と高評価につながった。学校側と地域側の役割分担を明確にすることが課題である。 ①-2-2 自治会や小学校、事業所等と協働し、にんにくの種植え・収穫、販売を行った。また、中屋敷ケアプラザでの定期的な清掃等を行った。教員の体制を考慮し、実施回数を整理した。教員の業務負担、持続可能性が課題である。 大和南分教室は大和南高校の球技大会(ポッチャ)に参加した。翌年度の体育祭に参加予定である。	①-1 巡回相談の質の向上を目指して、市町村と連携しながら進める。 ①-2-1 学校側と地域側の役割分担をより明確にすることで、属人的な運営を防ぎ、活動の安定性を確保するとともに、教員の負担を軽減し、持続可能な形にできるようにする。 ①-2-2 園芸博があり、地域の様相が変わる可能性があるが、これまで通り地域との良い関係を維持する。 地域との協働業務を担う教員や外部協力者の活用を検討し、地域との協働による教育活動を推進するとともに、教員の業務負担軽減を図る。
5	学校管理 学校運営	①児童・生徒が安心、安全に過ごせる教育環境の整備と危機管理体制を構築する。 ②事故、不祥事のない学校であるよう、管理・運営を行う。	①老朽化に対応した工事を安全に実施する。また、実際の場面や状況を意識した防災訓練等を実施する。 ②事故、不祥事を他人事ではなく自分事として捉える職場風土を醸成する。また、神奈川の教員の働き方改革加速化宣言(令和7年3月28日)を受け、働き方改革を推進する。	①-1 年間を通じて計画的に工事を実施するとともに、緊急時の対応を迅速に行う。 ①-2 水害や経路遮断等、様々な状況を想定した訓練を実施する。 ②-1 定期的にチェックシートを活用し、職員の意識向上を図るとともに、学部長・室長・グループリーダーを中心に、教員一人ひとりが参加できる研修会を企画・実施する。 ②-2 業務や行事等の精選を行うことができたか。	①-1 安全に、計画的に工事を実施することができたか。また、緊急時は迅速に対応できたか。 ①-2 実際の場面や状況を意識した訓練を実施できたか。 ②-1 定期的にチェックシートを活用することができたか。また、学部長・室長・グループリーダーを中心に、教員一人ひとりが参加できる研修会を企画・実施できたか。 ②-2 業務や行事等の精選を行うことができたか。また、外部人材の拡充や校務DX化の推進ができたか。	①-1C棟屋上防水工事とB棟給水管工事を実施した。雨漏りや水道管破損への対応など、緊急時の対応も迅速に行うことができた。 ①-2 消火器消火栓訓練を実際に操作して行った。防災訓練では水害を想定した垂直避難の訓練を実施した。火災による経路遮断を想定した避難訓練も実施した。 ②-1 月に1回不祥事防止研修会を行った。毎回テーマを変え、チェックシートを活用して取り組んだ。学年ごとに協議し、1人ひとりが参加する機会も設けた。 ②-2 集団宿泊的行事の実施学年や実施期間を見直した。 小学部ではA Iによる文書や教材の作成方法等を共有した。中学部ではA Iで作曲するなど、業務を効率化し成果を得ることができた。	①-1 児童生徒数増に伴う教室の改修工事も行った。今後も老朽化や対応だけでなく、教室転用の工事等を含め、適宜対応をしていきたい。 ①-2 引き続き実際の場面や状況を意識して、様々な状況を想定した訓練を実施していきたい。 ②-1 不祥事案は生じなかったが、他人事ではなく自分事として捉える職場風土を醸成するために、参加型の研修会を増やしていききたい。 ②-2 引き続き教育的意義を踏まえ、業務や行事等の精選を進める。 A Iの活用が学部単位で進められた。学校全体として取組を共有し、業務改善に取り入れていけるとよい。	①-1 瀬谷は古い学校だが、しっかりと維持できている。環境としては伸び伸びとした空間が保たれており、子ども達にとってとても良い。 ①-2 30年前に水没し、膝まで水が来たことがある。引き続き多様な状況の訓練を実施してほしい。 ②-1 引き続き参加型の研修会に取り組んでいってほしい。 ②-2 多様な働き方が増えている。引率できる教員が少なくなってきた。物価高騰で今までの予算では行けなくなってきた。業務の精選は致し方ないところがある。	①-1 C棟屋上防水工事やB棟給水管工事など、老朽化対策工事を実施した。雨漏りや水道管破損への対応、教室転用工事などを行うことができた。 ①-2 消火器・消火栓訓練、境川の氾濫を想定した垂直避難訓練、避難経路遮断を想定した訓練を実施した。敷地が広いいため、情報伝達の確実性を確保することが課題である。 ②-1 月に1回不祥事防止研修会を実施し、チェックシートを活用したり、学年ごとに協議を行ったりすることで、職員1人ひとりが主体的に取り組めるようにした。 ②-2 集団宿泊的行事の実施学年や実施期間の見直しを行うことができた。A Iの活用を学部単位で進めることができた。紙媒体に代わり電子媒体の活用を進めた。	①-1 今あるものを長く使う視点に立って、引き続き老朽化への対策を行う。校舎は古いですが、敷地が広いという強みを生かしていく。 ①-2 様々な場面を想定し、準備しておくことが重要である。想定外に対応できる柔軟な体制の構築が必要である。また、通信機器など、通信手段の活用精度を高める訓練を実施する。 ②-1 職員一人ひとりが受け身ではなく、主体的に考えていけるように研修を充実させていく必要がある。 ②-2 省力化のつもりが逆に仕事が増えることもある。どこを省き、どこを残すのかが学校全体で考える必要がある。会議資料の印刷や配付の手間を省くことも必要である。